

子ども期のスポーツ環境と自己認識に関する研究 ～組織形態と役割経験の分析から～

清水 一巳

大隈 節子*

A Study of Sport Environment in Childhood and Self-Awareness
: analysis of sport organization and role-experience

Kazumi SHIMIZU

Setsuko OKUMA

子どものスポーツ活動の二極化が起きている現状に問題意識をおき、その構造を分析する。子どものスポーツ経験について、小学校期、中学校期、高校期、大学期の構造（組織形態）とスポーツ経歴、役割、自治、志向の経験との関連を明らかにすることを目的としている。大学生を対象とした質問紙調査により得られたデータを分析し、①子ども期のスポーツ経験は上位集団の競技レベルにつながりを持っているが、②子ども期にスポーツ経験が少ない方が、青年期における自治的スポーツ活動において、満足度、人間関係、意欲、集団への愛着が高くなることなどを明らかにした。

1. はじめに

2012年に発表された『青少年のスポーツライフ・データ2012』（笹川スポーツ財団、2012）において、10代のスポーツ活動が「二極化が進展していること」が報告された。そこでは、スポーツの「非実施者」が14.5%となり、2005年調査の11.7%、2009年調査の14.4%と徐々に増加していることが示された。また、「週5回以上」のスポーツ活動の実施者は、51.1%となり、そのうち33.2%は週7回以上の実施者で「10代の3人に1人が週7回以上、運動・スポーツを行なっている」ことが明らかにされた。また、学校期別では、非実施群は進学するにつれ上昇し、高頻度群（週7回以上）は中学校期をピークに減少することが明らかにされた。

これまで、スポーツ活動の二極化とスポーツ集団の構造との関連について検討してきた（清水、2011）。そこでは、スポーツ集団（スポーツ少年団と学校運動部）の構造について、「監督・コーチとクラブ員」、「先輩と後輩」といった明確な上下の役割関係を通して、「教育的意義（達成感、継続性、協調性など）が明示的に示され、全体主義的に達成」されることが目的とされ、「結果との結びつきを容易に予測することができ、費やす時間の妥当性が決定されてくる」集団が形成されていることを指摘してきた。

*三重大学教育学部

一方で、このような構造をもつ部活動やクラブとは別に、自由時間にスポーツを実施している子どもが23%にのぼるという調査(NHK放送文化研究所,2006)もある。ここでのスポーツは、自由に行われるものであり、遊びの意味合いを強くもったものだといえる。しかし、この調査では、自由時間におけるスポーツも小学生で行為者率が高く、学校が上がると行為者率が少なくなり、高校生ではほぼ大人と同程度となり、「高校生になると遊びやスポーツから会話・交際へ」自由時間が費やされていると指摘されている。同様に、スポーツクラブ・運動部への加入状況をみても小学校期が最も加入率が高く、学校が上がるにつれ加入率は低下している(笹川スポーツ財団,2012)。つまり、現代の子ども期では、「遊び」および「スポーツ」が各学校期における経験を経て、「限定された意味を持つ活動」となっているといえる。

本研究では、各学校期におけるスポーツ経験のもつ青年期のスポーツ意識(自己認識)への影響について検討していく。特に子ども期には、各学校期においてスポーツとの関わりを選択することが求められてくる。スポーツへの関わりにおいて、「忌避」と「過度の没入」という二極の選択がなされている状況について、各学校期のスポーツ経験における役割形成という視点からその構造を明らかにすることは、今後の子どものスポーツ環境を考えるうえで有意なものと考ええる。

2. 研究の枠組み

1) スポーツ参与の二極化の問題

子ども期のスポーツ経験によりスポーツへの意味づけがなされ、スポーツ界における役割期待の形成へとつながっていくと考えられる。このスポーツ経験と役割期待の連鎖において、スポーツへの関わり方の二極化が深化していることは、スポーツ参加者の選別という側面が強調されてくることになる。子どもの体力低下やスポーツ傷害といった身体的問題への対応だけでなく、スポーツ組織が社会の選抜体系の一部を担うことになり、スポーツを一部の選抜された者の活動として位置づけることとなる。このようなスポーツの特性は、「合理的かつ効率的思考を第一義とする価値」(目的の為に手段を選ばない)や「子ども文化全体が解体」するほどの生活状況を生み出すと山本氏(2005)は指摘する。このスポーツ組織の選抜機能の強化とスポーツ価値の一元化をつくり上げている問題について、このスポーツ制度を維持している社会的行為に焦点化し、分析をおこなっていく。

本研究では、子ども期に特徴的な、各学校期におけるスポーツ活動の経験とスポーツ活動の選択との関連について明らかにしていく。ここでは、スポーツ内の経験(競技歴、競技レベルなど)だけでなく、スポーツ集団内での役割経験(正副キャプテンや集団内の重要事項の決定過程への参加など)も含めスポーツ経験として捉えていく。

スポーツ選択に関連する各学校期のスポーツ経験を抽出することにより、スポーツ環境

(集団構造) のもつ、スポーツを通した子どもの自己認識への影響について明らかにすることを目的とする。

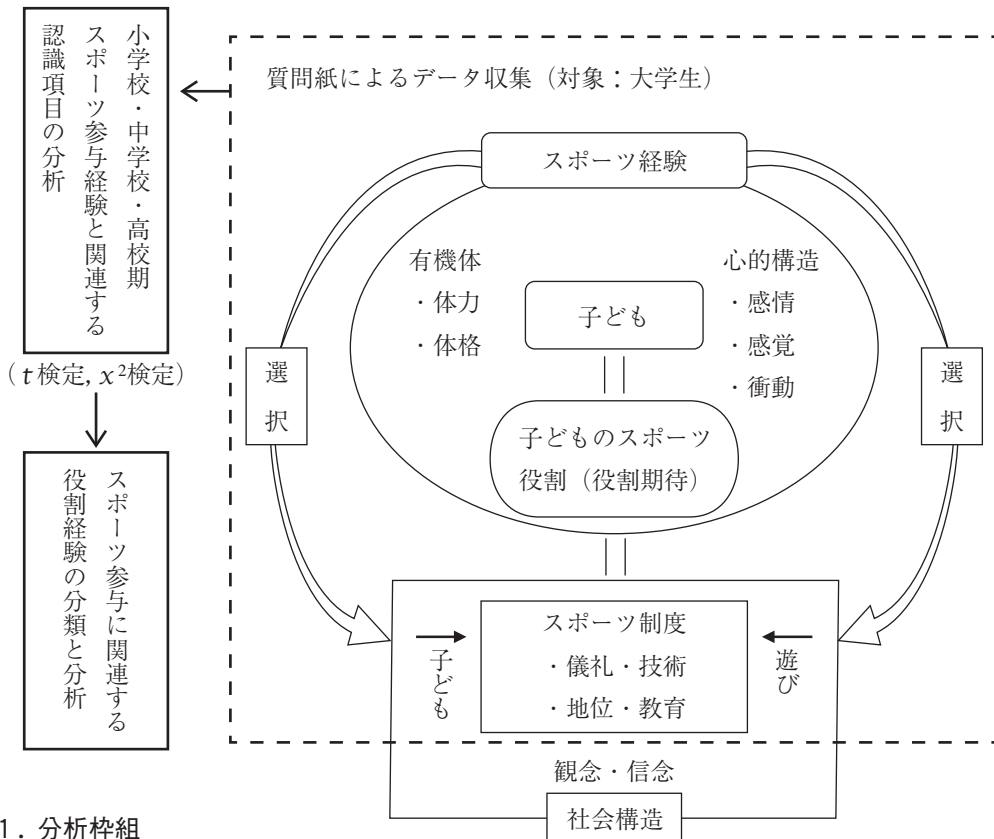


図1. 分析枠組

2) スポーツ組織における役割経験の分類

スポーツの中での役割形成において重要なのが、スポーツ特有の技術との関わりを挙げることができる。

スポーツ技術とは、「定型化され、世代から世代へと伝達される、状態（ヘクシス）としての複合的行動様式である」（菅原, 1984）とされる。つまり、一定の型が形成され、人から人へと伝達される型であるということが出来る。荒井（2003）はスポーツ空間論としてコート（スポーツ）の中では、「単一の、しかもプレイヤーが納得したルール（規則）があることであり、アカウントビリティ、説明責任がクリアである」として、フェアな競争があるとしている。ここにある関係は「納得したルール（規則）」により形成されており、他者（もしくは自分）との闘い、競い合いという関係性はある型（規則）をもったスポーツ技術により、支えられたものとなる。このスポーツ技術が「意味のあるシンボル」となりスポーツの中での自己を対象化し、スポーツの中での役割行動として現れてくることになる。

それに対して、スポーツの外での役割経験には実社会の関係性、いわゆる「日常社会のロール(役割)」に影響を受けているとみることができる。スポーツ集団の内側の役割には、「監督・コーチとクラブ員」、「先輩と後輩」、「レギュラーと非レギュラー」といった役割の影響が考えられる。また、子ども期特有のスポーツ集団の外側関係性として、「親-子」、「兄-弟、姉-妹」「指導者-保護者」などの役割の重なりを挙げることができる。

本研究では、スポーツ活動の中での経験を①スポーツの経験とし、スポーツ活動を維持する為の集団内での経験を②キャプテンなどの役割経験、③重要事項の決定などへの参加経験、④スポーツへの志向(勝利志向)経験として分類し、その後のスポーツ参与との関連を分析していく。

3) 質問紙調査の概要

① 調査方法

- (1) 調査日：2011年10月3日～7日
- (2) 調査対象者：A大学の1年生562名
- (3) 調査方法：集合法により実施し、回答は無記名で実施時間は20分間程度で行なった。
- (4) 質問紙の構成：フェースシート、大学生活について、授業時間外の過ごし方について、過去のスポーツ活動について、EPSI項目尺度について
- (5) 分析方法：SPSSにより、各検討項目(各項目と各学校期の競技レベルと現在のスポーツとの関わり方)についてt検定を行なった。また、各学校期間におけるスポーツ活動の組織形態の関連については χ^2 検定による有意差のあるものを示している。

② 属性(表1-①, ②)

大学1年次の大学組織内でのクラブ・サークルへの加入状況は、全体の74.2%が何らかのクラブ・サークルに加入している。スポーツ系のクラブ・サークルへの加入者は全体の50%(269名)となっている。本報告では、おもにスポーツ系クラブ・サークルの加入者を分析の対象とする。

表1-① 性別と大学学年

			学年				合計
			1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	
性別	男性	度数	339	4	4	1	348
		性別 の %	97. 4%	1. 1%	1. 1%	. 3%	100. 0%
	女性	度数	192	1	11	8	212
		性別 の %	90. 6%	. 5%	5. 2%	3. 8%	100. 0%
合計		度数	531	5	15	9	560
		性別 の %	94. 8%	. 9%	2. 7%	1. 6%	100. 0%

表１－② 性別とクラブ・サークルへの加入状況

			クラブ・サークルへの加入状況					合計
			所属していない	文化系クラブ・ サークル	スポーツ系 クラブ	スポーツ系 サークル	医学部スポー ツ系クラブ	
性別	男性	度数	90	68	65	108	3	334
		性別 の %	26. 9%	20. 4%	19. 5%	32. 3%	. 9%	100. 0%
	女性	度数	49	63	28	60	5	205
		性別 の %	23. 9%	30. 7%	13. 7%	29. 3%	2. 4%	100. 0%
合計		度数	139	131	93	168	8	539
		性別 の %	25. 8%	24. 3%	17. 3%	31. 2%	1. 5%	100. 0%

3. 結果

1) 組織的スポーツ経験の有無

現在(大学期)のクラブ・サークルへの加入状況と各学校期における組織的スポーツ経験では、中学校期および高校期の組織的スポーツ経験の有無との関連がみられた。各学校期の組織的スポーツ経験者の割合は、中学校期で非所属(73.9%)、文化系クラブ・サークル所属者(76.5%)に比べ、スポーツ系のクラブ・サークルへの所属者(92.3%, 93.4%, 87.5%)が高く、高校期でも、非所属(52.8%)、文化系クラブ・サークル所属者(40.9%)に比べ、スポーツ系のクラブ・サークルへの所属者(クラブ85.1%, サークル77.7%, 医クラブ71.4%)が高くなっている。(表2－①)

表2－① 現在：大学期のクラブ・サークルへの加入×各学校期のスポーツ経験

			小学校期組織でのスポーツ経験			中学校期組織でのスポーツ経験			高校期組織でのスポーツ経験		
			経験無し	経験有り	合計	経験無し	経験有り	合計	経験無し	経験有り	合計
クラブ・サークルへの加入状況	所属していない	度数	35	77	112	30	85	115	50	56	106
		%	31.3%	68.8%	100.0%	26.1%	73.9%	100.0%	47.2%	52.8%	100.0%
	文化系クラブ・サークル	度数	37	78	115	27	88	115	65	45	110
		%	32.2%	67.8%	100.0%	23.5%	76.5%	100.0%	59.1%	40.9%	100.0%
	スポーツ系クラブ	度数	29	60	89	7	84	91	13	74	87
		%	32.6%	67.4%	100.0%	7.7%	92.3%	100.0%	14.9%	85.1%	100.0%
	スポーツ系サークル	度数	41	107	148	10	142	152	33	115	148
		%	27.7%	72.3%	100.0%	6.6%	93.4%	100.0%	22.3%	77.7%	100.0%
	医学部スポーツ系クラブ	度数	4	4	8	1	7	8	2	5	7
		%	50.0%	50.0%	100.0%	12.5%	87.5%	100.0%	28.6%	71.4%	100.0%
	合計	度数	146	326	472	75	406	481	163	295	458
		%	30.9%	69.1%	100.0%	15.6%	84.4%	100.0%	35.6%	64.4%	100.0%

$\chi^2=2.286$

df.=4

$\chi^2=28.813$

df.=4

p<.001

$\chi^2=60.441$

df.=4

p<.001

次に、現在のスポーツ系クラブ・サークル所属者を対象とした、各学校期の組織的スポーツ活動の経験の有無と、現在のスポーツ活動の認識(①クラブ・サークルの満足度, ②関係性, ③活動意欲, ④愛着, 5段階: 1 あてはまらない-2-3-4-5 あてはまる), 各学校期における競技レベル(1 市町村レベル, 2 県大会レベル, 3 地域ブロックレベル, 4 全国大会レベル, 5 それ以上, 5段階)では、次の項目において関連がみられた。

小学校期では、経験の有る群が、中学校期の競技レベルにおいて高い値(無-有: 平均値

1.38－1.72) となった。しかし、次の項目においては、経験の無い群の方の値が高くなった。「活動への満足度」(4.42－4.04),「クラブ員でお互いを認め合う」(4.23－3.93),「活動意欲」(4.43－4.16),「クラブ・サークルへの愛着」(4.46－4.19)。(表2－②)

中学校期では、「技術面で教えあう」(4.50－3.96),「活動意欲」(4.67－4.21),「愛着」(4.61－4.25)において、経験の無い群の方が高くなった。(表2－③)

高校期では、「活動の満足度」(4.42－4.08) (「高校期の競技レベル」2.50－1.87)において経験のない群が高い値となり,「小学校の競技レベル」(1.30－1.70)で経験の有る群において高い値となった。(表2－④)

表2－② 小学校期の組織スポーツ経験の影響

	組織スポーツ活動の経験無し			組織スポーツ活動の経験有り			t値	
	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD		
クラブ・サークル活動への満足度	74	4.42	.662	171	4.04	1.002	2.974	**
クラブ・サークル活動の人間関係満足度	74	4.18	.956	171	4.11	.997	.471	
クラブ・サークル活動と学業の重視度	73	3.08	1.010	170	3.02	1.012	.456	
クラブ・サークル活動時に何かうまくいかなかった時、お互いに励まし合う	74	3.80	.921	171	3.56	1.091	1.781	
クラブ・サークルの一員として互いの存在を認め合う	74	4.23	.750	171	3.93	.892	2.531	**
クラブ・サークル活動中に技術面などでできないことを教え合う	74	4.05	.949	171	3.98	.901	.608	
クラブ・サークルへの活動意欲	74	4.43	.829	171	4.16	1.042	2.195	*
クラブ・サークルへの愛着	74	4.46	.744	170	4.19	1.015	2.332	*
小学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	8	1.88	1.126	143	1.66	.889	.665	
中学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	64	1.38	.604	157	1.72	.815	-3.458	**
高校期で最も成績の良かった時の競技レベル	54	1.85	.787	135	1.89	.687	-.321	

*p<.05 **p<.01

表2－③ 中学校期の組織スポーツ経験の影響

	組織スポーツ活動の経験無し			組織スポーツ活動の経験有り			t値	
	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD		
クラブ・サークル活動への満足度	18	4.56	.616	233	4.13	.938	1.897	
クラブ・サークル活動の人間関係満足度	18	4.28	.826	233	4.13	.993	.602	
クラブ・サークル活動と学業の重視度	17	3.41	1.121	232	3.02	1.017	1.517	
クラブ・サークル活動時に何かうまくいかなかった時、お互いに励まし合う	18	4.06	1.259	233	3.60	1.021	1.789	
クラブ・サークルの一員として互いの存在を認め合う	18	4.17	1.150	233	4.00	.838	.769	
クラブ・サークル活動中に技術面などでできないことを教え合う	18	4.50	.618	233	3.96	.923	2.451	*
クラブ・サークルへの活動意欲	18	4.67	.485	233	4.21	1.006	3.458	**
クラブ・サークルへの愛着	18	4.61	.608	232	4.25	.960	2.335	*
小学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	6	1.83	1.329	145	1.66	.884	.456	
中学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	4	2.00	.816	222	1.62	.779	.962	
高校期で最も成績の良かった時の競技レベル	6	2.00	.632	188	1.89	.726	.372	

*p<.05 **p<.01

表 2－④ 高校期の組織スポーツ経験の影響

	組織スポーツ活動の経験無し			組織スポーツ活動の経験有り			t値	
	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD		
クラブ・サークル活動への満足度	48	4.42	.710	194	4.08	.965	2.286	*
クラブ・サークル活動の人間関係満足度	48	4.35	.758	194	4.08	1.033	1.744	
クラブ・サークル活動と学業の重視度	47	2.98	1.093	193	3.06	.993	-.506	
クラブ・サークル活動時に何かうまくいかなかった時、お互いに励まし合う	48	3.83	.975	194	3.58	1.041	1.513	
クラブ・サークルの一員として互いの存在を認め合う	48	4.08	.821	194	3.99	.849	.651	
クラブ・サークル活動中に技術面などでできないことを教え合う	48	3.98	.934	194	3.98	.916	-.001	
クラブ・サークルへの活動意欲	48	4.29	.922	194	4.21	1.014	.500	
クラブ・サークルへの愛着	48	4.44	.712	193	4.22	.997	1.755	
小学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	20	1.30	.657	125	1.70	.909	-2.359	*
中学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	35	1.63	.731	183	1.61	.796	.114	
高校期で最も成績の良かった時の競技レベル	6	2.50	1.049	188	1.87	.705	2.114	*

*p<.05 **p<.01

2) スポーツ集団内の役割経験の有無

①役職経験の有無

各学校期のスポーツ経験における役職（正，副キャプテン）経験の有無と現在のスポーツ活動の認識，各学校期の競技レベルでは，次の項目において関連がみられた。

小学校期では，現在のスポーツ活動の認識との関連はみられなかったが，競技レベルとの関連がみられ，中学校期（無－有：平均値1.63－1.90），高校期（1.82－2.07）と役職経験の有る群において，その後の競技レベルが高かった。（表3－①）

中学校期の役職経験と現在のスポーツ活動の認識，競技レベルとの関連はみられなかった。高校期でも，現在のスポーツ活動の認識との関連はみられなかったが，中学校期の競技レベルとの関連がみられ，役職経験の有る群の競技レベルが高かった（1.53－1.82）。（表3－②）

表 3－① 小学校期の役職経験（正副キャプテン）

	役職経験無し			役職経験有り			t値	
	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD		
クラブ・サークル活動への満足度	115	4.11	.915	53	3.91	1.114	1.272	
クラブ・サークル活動の人間関係満足度	115	4.08	1.061	53	4.21	.885	-.772	
クラブ・サークル活動と学業の重視度	113	2.90	.945	53	3.19	1.093	-1.728	
クラブ・サークル活動時に何かうまくいかなかった時、お互いに励まし合う	115	3.51	1.046	53	3.55	1.153	-.190	
クラブ・サークルの一員として互いの存在を認め合う	115	3.92	.880	53	4.00	.920	-.528	
クラブ・サークル活動中に技術面などでできないことを教え合う	115	3.95	.877	53	4.00	1.019	-.340	
クラブ・サークルへの活動意欲	115	4.19	.945	53	4.13	1.127	.355	
クラブ・サークルへの愛着	115	4.17	1.002	53	4.19	1.110	-.086	
小学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	99	1.60	.925	48	1.75	.812	-.984	
中学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	104	1.63	.778	51	1.90	.831	-2.036	*
高校期で最も成績の良かった時の競技レベル	88	1.82	.687	42	2.07	.640	-2.008	*

*p<.05 **p<.01

表 3－② 高校期の役職経験（正副キャプテン）

	役職経験無し			役職経験有り			t値
	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	
クラブ・サークル活動への満足度	125	4.00	.967	67	4.13	.952	-.922
クラブ・サークル活動の人間関係満足度	125	3.96	1.110	67	4.22	.918	-1.664
クラブ・サークル活動と学業の重視度	123	3.03	.999	67	3.15	.989	-.772
クラブ・サークル活動時に何かうまくいかなかった時、お互いに励まし合う	125	3.54	1.126	67	3.54	.927	-.009
クラブ・サークルの一員として互いの存在を認め合う	125	4.02	.833	67	3.93	.926	.691
クラブ・サークル活動中に技術面などでできないことを教え合う	125	3.91	.984	67	4.04	.860	-.930
クラブ・サークルへの活動意欲	125	4.12	1.052	67	4.34	.914	-1.466
クラブ・サークルへの愛着	124	4.12	1.056	67	4.33	.944	-1.343
小学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	82	1.62	.884	42	1.81	.917	-1.104
中学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	116	1.53	.796	62	1.82	.736	-2.431 *
高校期で最も成績の良かった時の競技レベル	119	1.84	.676	65	1.91	.723	-.630

*p<.05 **p<.01

②自治経験（決定権）の有無

小学校期，中学校期，高校期の自治的活動経験の有無と現在のスポーツとの関わり方との関連はみられなかった。

各学校段階の自治経験とその後の学校段階における自治経験の関連をみると小学校期の経験と中学校期の経験，中学校期の経験と高校期の経験において関連がみられた。どちらも下位学校期において自治経験を有する群において，上位学校期における自治経験が高くなっている。（表 4－①，②）

表 4－① 自治経験（小学校×中学校）

			中学校期の集団内での重要な物事（キャプテンやレギュラー決めなど）に対する決定権の所在			合計
			決定権が監督・コーチなど部員外者にあった	決定権が主将・上級生など一部の有力部員にあった	決定権が部員全員にあった	
集団決定権小学校期	部員以外により決定（監督・コーチなど）	度数	172	43	27	242
		%	71.1%	17.8%	11.2%	100.0%
	部員により決定（代表もしくは全体）	度数	3	21	26	50
		%	6.0%	42.0%	52.0%	100.0%
合計		度数	175	64	53	292
		%	59.9%	21.9%	18.2%	100.0%

$\chi^2=78.465$ d.f.=2 p<.001

表 4－② 自治経験（中学校×高校）

			高校期の集団内での重要な物事（キャプテンやレギュラー決めなど）に対する決定権の所在			合計
			決定権が監督・コーチなど部員外者にあった	決定権が主将・上級生など一部の有力部員にあった	決定権が部員全員にあった	
集団決定権小学校期	部員以外により決定（監督・コーチなど）	度数	105	48	38	191
		%	55.0%	25.1%	19.9%	100.0%
	部員により決定（代表もしくは全体）	度数	4	10	17	31
		%	12.9%	32.3%	54.8%	100.0%
合計		度数	109	58	55	222
		%	49.1%	26.1%	24.8%	100.0%

$$\chi^2=23.278 \quad \text{d.f.}=2 \quad p<.001$$

③志向性（勝利志向の有無）

小学校期のスポーツ志向（勝利志向－楽しみ志向）の有無と現在のスポーツとの関わり方では、関連がみられなかったが、小学校期の志向と競技レベルにおいて関連がみられた。勝利志向群の競技レベルが高くなっていた（勝利－楽しみ：平均値1.85－1.38）。（表 5－①）

中学校期のスポーツ志向も同様に、現在のスポーツとの関わり方では、関連がみられなかったが、中学校期の志向と競技レベルにおいて関連がみられた。勝利志向群の競技レベルが高くなっていた（1.73－1.41）。（表 5－②）

高校期においても、志向と競技レベルとの関連がみられた（2.01－1.56）。さらに、高校期の志向は、現在のスポーツとの関わり方の「人間関係満足度」（4.18－3.82）、「クラブへの愛着」（4.32－3.98）との関連がみられ、いずれも勝利志向群において高い値となっていた。（表 5－③）

表 5－① 小学校期のスポーツ志向（勝利志向）経験の影響

	勝利志向			楽しみ志向			t値
	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD	
クラブ・サークル活動への満足度	102	3.96	1.043	75	4.16	.931	-1.314
クラブ・サークル活動の人間関係満足度	102	4.11	.974	75	4.12	1.065	-.079
クラブ・サークル活動と学業の重視度	101	2.88	1.023	74	3.12	1.033	-1.530
クラブ・サークル活動時に何かうまくいかなかった時、お互いに励まし合う	102	3.46	1.105	75	3.67	1.044	-1.254
クラブ・サークルの一員として互いの存在を認め合う	102	3.95	.872	75	3.92	.926	.227
クラブ・サークル活動中に技術面などでできないことを教え合う	102	3.90	.990	75	4.05	.820	-1.079
クラブ・サークルへの活動意欲	102	4.18	1.009	75	4.17	1.045	.020
クラブ・サークルへの愛着	102	4.15	1.028	75	4.21	1.044	-.421
小学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	93	1.85	.977	60	1.38	.691	3.452 **
中学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	95	1.82	.863	68	1.57	.739	1.915
高校期で最も成績の良かった時の競技レベル	81	1.91	.616	58	1.91	.823	-.002

*p<.05 **p<.01

表5－② 中学校期のスポーツ志向（勝利志向）経験の影響

	勝利志向			楽しみ志向			t値	
	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD		
クラブ・サークル活動への満足度	166	4.13	.982	75	4.12	.854	.095	
クラブ・サークル活動の人間関係満足度	166	4.16	.993	75	4.08	1.010	.595	
クラブ・サークル活動と学業の重視度	165	2.95	1.020	75	3.17	1.018	-1.605	
クラブ・サークル活動時に何かうまくいかなかった時、お互いに励まし合う	166	3.61	1.001	75	3.53	1.095	.566	
クラブ・サークルの一員として互いの存在を認め合う	166	4.00	.874	75	4.01	.846	-.111	
クラブ・サークル活動中に技術面などでできないことを教え合う	166	3.93	.961	75	3.99	.893	-.405	
クラブ・サークルへの活動意欲	166	4.27	.975	75	4.09	1.042	1.283	
クラブ・サークルへの愛着	166	4.25	.995	74	4.20	.951	.367	
小学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	109	1.72	.914	44	1.57	.873	.915	
中学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	160	1.73	.791	71	1.41	.709	2.953 *	
高校期で最も成績の良かった時の競技レベル	131	1.92	.675	62	1.81	.807	.992	

*p<.05 **p<.01

表5－③ 高校期のスポーツ志向（勝利志向）経験の影響

	勝利志向			楽しみ志向			t値	
	N	MEAN	SD	N	MEAN	SD		
クラブ・サークル活動への満足度	148	4.14	.911	57	3.93	1.100	1.407	
クラブ・サークル活動の人間関係満足度	148	4.18	.997	57	3.82	1.120	2.224 *	
クラブ・サークル活動と学業の重視度	148	3.05	1.039	56	3.11	.966	-.374	
クラブ・サークル活動時に何かうまくいかなかった時、お互いに励まし合う	148	3.63	1.090	57	3.46	.965	1.046	
クラブ・サークルの一員として互いの存在を認め合う	148	4.05	.847	57	3.86	.875	1.458	
クラブ・サークル活動中に技術面などでできないことを教え合う	148	4.00	.940	57	3.91	.931	.600	
クラブ・サークルへの活動意欲	148	4.28	1.004	57	4.09	.969	1.265	
クラブ・サークルへの愛着	147	4.32	.972	57	3.98	1.061	2.167 *	
小学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	97	1.70	.892	35	1.66	.968	.244	
中学校期で最も成績の良かった時の競技レベル	140	1.68	.816	51	1.47	.731	1.601	
高校期で最も成績の良かった時の競技レベル	144	2.01	.674	54	1.56	.744	3.899 **	

*p<.05 **p<.01

小，中，高校でのスポーツへの志向性と大学でのクラブ・サークルへの加入状況をみると，小学校期と高校期の志向（勝利志向，楽しみ志向）との関連がみられた。（表5－④，⑤）

小，高ともに勝利志向のものは体育系クラブ（小18.0%，高26.6%），体育系サークル（小39.5%，高43.0%）への加入が多く，楽しみ志向のものは所属していない（小30.4%，高29.2%），文化系サークル（小25.7%，29.2%）への加入が多くなっている。

表 5－④ 小学校期の志向性と大学：現在のクラブ加入状況

			クラブ・サークルへの入部状況					合計	
			所属していない	文化系クラブ・ サークル	体育系クラブ	体育系サークル	医学部体育系 クラブ		
小学校期志向性	勝利志向	度数	33	37	31	68	3	172	
		%	19. 2%	21. 5%	18. 0%	39. 5%	1. 7%	100. 0%	
	楽しみ志向	度数	52	44	29	44	2	171	
		%	30. 4%	25. 7%	17. 0%	25. 7%	1. 2%	100. 0%	
	合計		度数	85	81	60	112	5	343
			%	24. 8%	23. 6%	17. 5%	32. 7%	1. 5%	100. 0%

$\chi^2=10.259$

d.f.=4

p<.05

表 5－⑤ 高校期の志向性と大学：現在のクラブ加入状況

			クラブ・サークルへの入部状況					合計	
			所属していない	文化系クラブ・サークル	体育系クラブ	体育系サークル	医学部体育系クラブ		
高校期志向性	勝利志向	度数	32	27	55	89	4	207	
		%	15.5%	13.0%	26.6%	43.0%	1.9%	100.0%	
	楽しみ志向	度数	31	18	22	34	1	106	
		%	29.2%	17.0%	20.8%	32.1%	.9%	100.0%	
	合計		度数	63	45	77	123	5	313
			%	20.1%	14.4%	24.6%	39.3%	1.6%	100.0%
χ²=10.896 d.f.=4 p<.05									

3) 小学校期の組織的スポーツ経験とスポーツ参与形態

① 小学校期の組織的スポーツ経験と中、高、大におけるスポーツ組織選択との関連

小学校期のスポーツ経験（組織形態）は、中学校期と高校期における組織的スポーツの経験と関連がみられた。（表 6－①，②）

小学校期に組織的スポーツ経験のない群において、中学校期の組織的スポーツ経験のないもの割合が高く 34.6%であった。小学校期に組織的スポーツの経験があるものは、中学校においても組織的スポーツの経験を有するものが多くなっている。小学校期の組織的スポーツ経験のある群では何れの形態においても、中学校期の学校運動部での経験が最も多く 7 割を超えていた。なかでも学校中心のスポーツ活動の経験のある群において、中学校期の学校運動部での経験が 90.4%と最も高くなっていた。

高校期の組織的スポーツとの関連では、小学校期の組織的スポーツの経験のない群において、高校期の組織的スポーツの経験のないものが 53.5%で最も高い割合となった。組織的スポーツ経験のある群では、何れの形態においても高校での学校運動部の経験が最も多く 6 割を超えていた。

表6－① 組織形態の関連（小学校期－中学校期）

			中学校期のスポーツ活動の組織形態					合計
			スポーツ組織での経験はない	学校の運動部活動	民間のスポーツクラブ	地域住民が主体のクラブ	個人的な活動	
小学校期の組織形態のスポーツ活動の	スポーツ組織での経験はない	度数	45	85	0	0	0	130
		%	34.6%	65.4%	.0%	.0%	.0%	100.0%
	学校の運動部活動	度数	11	123	2	0	0	136
		%	8.1%	90.4%	1.5%	.0%	.0%	100.0%
	民間のスポーツクラブ	度数	6	100	20	0	2	128
		%	4.7%	78.1%	15.6%	.0%	1.6%	100.0%
	地域住民が主体のクラブ	度数	5	65	0	4	1	75
		%	6.7%	86.7%	.0%	5.3%	1.3%	100.0%
	合計	度数	67	373	22	4	3	469
		%	14.3%	79.5%	4.7%	.9%	.6%	100.0%

$$\chi^2=128.617 \quad d.f.=12 \quad p<.001$$

表6－② 組織形態の関連（小学校期－高校期）

			高校期のスポーツ活動の組織形態						合計
			スポーツ組織での経験はない	学校の運動部活動	民間のスポーツクラブ	地域住民が主体のクラブ	個人的な活動	その他	
小学校期の組織形態のスポーツ活動の	スポーツ組織での経験はない	度数	69	58	1	0	1	0	129
		%	53.5%	45.0%	.8%	.0%	.8%	.0%	100.0%
	学校の運動部活動	度数	40	84	1	2	1	1	129
		%	31.0%	65.1%	.8%	1.6%	.8%	.8%	100.0%
	民間のスポーツクラブ	度数	29	86	4	0	1	0	120
		%	24.2%	71.7%	3.3%	.0%	.8%	.0%	100.0%
	地域住民が主体のクラブ	度数	16	53	0	1	1	0	71
		%	22.5%	74.6%	.0%	1.4%	1.4%	.0%	100.0%
	合計	度数	154	281	6	3	4	1	449
		%	34.3%	62.6%	1.3%	.7%	.9%	.2%	100.0%

$$\chi^2=42.104 \quad d.f.=15 \quad p<.001$$

②中学校期の組織的スポーツ経験とスポーツ参与形態

中学校期のスポーツ経験（組織形態）は、高校期と大学期（現在）の組織的スポーツの経験と関連がみられた。（表7－①，②）

中学校期の組織的スポーツの経験と高校期の経験では、中学校期での経験のない群において高校期も組織的スポーツの経験のないものが91.3%になっている。経験のある群においては何れの形態においても、高校期に学校運動部の経験が7割を超えている。

中学校期に組織的スポーツの経験のない群では、大学で組織的スポーツに参加していないもの（所属していない＋文化系クラブ・サークル：41.4%＋35.7%）が7割を超えている。

中学校の組織的スポーツ経験の形態別に見ると、学校運動部群で最も多いのが体育系サークル35.5%，民間のスポーツクラブ群で体育系クラブ30.4%，体育系サークル30.4%となっている。

表 7－① 組織形態の関連（中学校期－高校期）

			高校期のスポーツ活動の組織形態						合計
			スポーツ組織での経験はない	学校の運動部活動	民間のスポーツクラブ	地域住民が主体のクラブ	個人的な活動	その他	
中学校期の組織スポーツ活動の	スポーツ組織での経験はない	度数	63	6	0	0	0	0	69
		%	91.3%	8.7%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%
	学校の運動部活動	度数	93	276	4	2	3	1	379
		%	24.5%	72.8%	1.1%	.5%	.8%	.3%	100.0%
	民間のスポーツクラブ	度数	3	14	2	0	0	0	19
		%	15.8%	73.7%	10.5%	.0%	.0%	.0%	100.0%
	地域住民が主体のクラブ	度数	0	3	0	1	0	0	4
		%	.0%	75.0%	.0%	25.0%	.0%	.0%	100.0%
	合計	度数	159	299	6	3	3	1	471
		%	33.8%	63.5%	1.3%	.6%	.6%	.2%	100.0%

$$\chi^2=171.346 \quad d.f.=15 \quad p<.001$$

表 7－② 組織形態の関連（中学校期－大学：現在）

			大学：現在のスポーツ活動の組織形態					合計
			所属していない	文化系クラブ・サークル	体育系クラブ	体育系サークル	医学部体育系クラブ	
中学校期の組織スポーツ活動の	スポーツ組織での経験はない	度数	29	25	7	8	1	70
		%	41.4%	35.7%	10.0%	11.4%	1.4%	100.0%
	学校の運動部活動	度数	80	84	74	135	7	380
		%	21.1%	22.1%	19.5%	35.5%	1.8%	100.0%
	民間のスポーツクラブ	度数	5	4	7	7	0	23
		%	21.7%	17.4%	30.4%	30.4%	.0%	100.0%
	地域住民が主体のクラブ	度数	0	0	3	0	0	3
		%	.0%	.0%	100.0%	.0%	.0%	100.0%
	合計	度数	114	113	91	150	8	476
		%	23.9%	23.7%	19.1%	31.5%	1.7%	100.0%

$$\chi^2=44.040 \quad d.f.=12 \quad p<.001$$

③高校期の組織的スポーツ経験とスポーツ参与形態

高校期のスポーツ経験（組織形態）は、大学期（現在）の組織的スポーツの経験と関連がみられた。（表 8－①）

高校期に組織的スポーツの経験のない群では、大学で組織的スポーツに参加していないもの（所属していない＋文化系クラブ・サークル：30.1%＋41.0%）が7割を超えている。

高校期の学校運動部群の6割以上が、大学における組織的スポーツに参加している（体育系サークル39.3%，体育系クラブ25.5%，医体育系クラブ1.7%）となっている。

表8 組織形態の関連（高校期—大学：現在）

			大学：現在のスポーツ活動の組織形態					合計
			所属していない	文化系クラブ・サークル	体育系クラブ	体育系サークル	医学部体育系クラブ	
高校期のスポーツ活動の組織形態	スポーツ組織での経験はない	度数	47	64	13	30	2	156
		%	30.1%	41.0%	8.3%	19.2%	1.3%	100.0%
	学校の運動部活動	度数	54	42	73	112	5	286
		%	18.9%	14.7%	25.5%	39.2%	1.7%	100.0%
	民間のスポーツクラブ	度数	1	3	0	2	0	6
		%	16.7%	50.0%	.0%	33.3%	.0%	100.0%
	地域住民が主体のクラブ	度数	1	0	1	1	0	3
		%	33.3%	.0%	33.3%	33.3%	.0%	100.0%
	合計	度数	103	109	87	145	7	451
		%	22.8%	24.2%	19.3%	32.2%	1.6%	100.0%
$\chi^2=66.895$ d.f.=12 p<.001								

$$\chi^2=66.895 \quad d.f.=12 \quad p<.001$$

4) スポーツ経験と現在のスポーツの目的

現在のスポーツ系クラブ・サークルでの活動目的と関連がみられたのは、中学校期の組織的スポーツ経験、高校期の組織的スポーツ経験および小学校期の志向経験であった。

中学校期の組織的スポーツ経験のない群では「他の目的を達成する」(44.4%) 割合が最も多く、経験の有る群では「能力の範囲内で活動を楽しむ」(43.8%) 割合が最も高かった。また、組織的スポーツ経験の有る群の「自分自身を鍛え、役に立てる」(25.8%), 「競技成績や評価の向上」(18.0%), 「能力の範囲内で活動を楽しむ」(43.8%) 割合が経験のない群よりも高かった。(表9-①)

高校期では、「能力の範囲内で活動を楽しむ」(経験無：47.9%, 経験有：40.7%) ものが最も多くなっている。組織的スポーツ経験の有る群の「自分自身を鍛え、役に立てる」(27.3%), 「競技成績や評価の向上」(20.6%) 割合が経験のない群よりも高かった。(表9-②)

表9-① 中学校期組織的スポーツ経験×現在の目的

			クラブ・サークル活動への参加目的				合計
			クラブ・サークル活動を通して自分自身を鍛えると共に、活動で得たことを何かに役立てるため	クラブ・サークル活動で自分を鍛えて能力を伸ばし、競技成績や評価の向上をめざすため	現在の自分自身の能力の範囲でクラブ・サークル活動を楽しむため	クラブ・サークル活動を楽しむと共に、活動を通して他の目的を達成するため	
中学校 スポーツ 組織 組織 経験 での	組織スポーツ活動の経験はない	度数	4	2	4	8	18
		%	22. 2%	11. 1%	22. 2%	44. 4%	100. 0%
	組織のスポーツを経験	度数	60	42	102	29	233
		%	25. 8%	18. 0%	43. 8%	12. 4%	100. 0%
合計		度数	64	44	106	37	251
		%	25. 5%	17. 5%	42. 2%	14. 7%	100. 0%

$$\chi^2=13.981 \quad d.f.=3 \quad p<.001$$

表 9－② 高校期組織的スポーツ経験×現在の目的

			クラブ・サークル活動への参加目的				合計
			クラブ・サークル活動を通して自分自身を鍛えると共に、活動で得たことを何かに役立てるため	クラブ・サークル活動で自分を鍛えて能力を伸ばし、競技成績や評価の向上をめざすため	現在の自分自身の能力の範囲でクラブ・サークル活動を楽しむため	クラブ・サークル活動を楽しむと共に、活動を通して他の目的を達成するため	
高校期スポーツ組織での経験	組織スポーツ活動の経験はない	度数	9	2	23	14	48
		%	18. 8%	4. 2%	47. 9%	29. 2%	100. 0%
	組織のスポーツを経験	度数	53	40	79	22	194
		%	27. 3%	20. 6%	40. 7%	11. 3%	100. 0%
合計		度数	62	42	102	36	242
		%	25. 6%	17. 4%	42. 1%	14. 9%	100. 0%
			$\chi^2=15.797$			d.f.=3	p<.001

また、勝利志向と楽しみ志向との関連では、どちらの志向においても最も多かったのが「能力の範囲で活動を楽しむ」目的であり、勝利志向群（52.9％）における割合が楽しみ志向群（32.0％）より高かった。これ以外の項目では、楽しみ志向群における割合が勝利志向群より高くなっている。（表9－③）

表 9－③ 小学校期の志向×現在の目的

			クラブ・サークル活動への参加目的				合計	
			クラブ・サークル活動を通して自分自身を鍛えると共に、活動で得たことを何かに役立てるため	クラブ・サークル活動で自分を鍛えて能力を伸ばし、競技成績や評価の向上をめざすため	現在の自分自身の能力の範囲でクラブ・サークル活動を楽しむため	クラブ・サークル活動を楽しむと共に、活動を通して他の目的を達成するため		
志向性	小学校期	勝利志向	度数	22	17	54	9	102
		%	21. 6%	16. 7%	52. 9%	8. 8%	100. 0%	
	中学校期	楽しみ志向	度数	21	14	24	16	75
		%	28. 0%	18. 7%	32. 0%	21. 3%	100. 0%	
合計		度数	43	31	78	25	177	
		%	24. 3%	17. 5%	44. 1%	14. 1%	100. 0%	
$\chi^2=9.924$ d.f.=3 p<.001								

4. 考察

1) スポーツ経験の影響

青年期前期に位置づけられる大学期のスポーツ活動と中学校期、高校期のスポーツ活動の経験が関連していることが明らかになった。大学期にスポーツ組織に所属していないものは中学校期にスポーツ経験の無いものが2割程度だったものが、高校期にスポーツ経験の無いものは5割から6割となり、学校段階が上がるにつれスポーツを行わないものは、その関わりが明確になってくる。しかし、スポーツ系の組織に加入しているものをみると、中学校期には9割のものが組織的スポーツの経験があるのに対して、高校期では7割から8割となっ

ている。ここから、中学校期のスポーツ活動の経験をベースに、高校期にスポーツ活動から一旦離れていたものも大学期にスポーツへの参加がなされていると考えることができる。

また、小学校期から中学校期、中学校期から高校期のスポーツ経験のつながりでは、スポーツ経験を有すると上位の学校での競技レベルが高くなっている。スポーツ経験の中で得られたスポーツ技術により、他者との競い合いという関係性の中での自己認識の側面があらわれてくる。しかし、この下位集団でのスポーツ経験があると上位集団での競技レベルが高くなるという関係は、山本氏(2005)が「今日の子どもスポーツは、現代スポーツの論理に支配されており、結果としてスポーツ場面において合理的・効率的思考を強いられている」と指摘するスポーツ環境によりつくりあげられたものと考えられるのではないだろうか。

現在(大学期)のスポーツ活動における満足度、活動意欲、クラブへの愛着などのスポーツとの関わり方やクラブ員をお互いに認め合う、お互いに技術を教えあうといったスポーツ集団内の人間関係において、子ども期のスポーツ経験の無いもののほうが、より高い満足度、意欲、愛着、認識を示している。これらの項目と競技レベルとの関連はみられなかったため、技術的側面からの活動内容に対しての満足度、意欲、愛着、認識を示しているものではないといえる。つまり、大学期のスポーツ活動において、子ども期のスポーツ経験の無いものは、競技レベルよりもスポーツ活動を介した人間関係を重視していると指摘できる。現代の子ども期のスポーツ経験は、競技レベルにおける経験の連続性はみられるが、スポーツ集団内の関係性形成という側面では経験の蓄積がなされないような構造となっているのではないだろうか。今回の調査対象が、競技レベルに特化した大学生ではないため、スポーツ経験の無いものにとって、スポーツ集団内での関係を形成することの出来やすい構造であったことも影響していると推測できる。

2) 各学校段階の経験のつながり

各学校段階の役職経験でも、大学期のスポーツとの関わりとは関連がみられず、競技レベルとの関連がみられた。特に小学校期の役職経験は中学校期、高校期の競技レベルと関連がみられた。これは、キャプテンや副キャプテンというスポーツ集団での中心的役割は技術的側面における競技レベルと密接に関わりながら役割形成がなされているとみることができる。

小学校期、中学校期では自治的経験が非常に少ない現状にあることから、現代の子どものスポーツ集団(小学校期、中学校期)では、キャプテンや副キャプテンという役割には、スポーツ活動の中、つまり技術的側面の競技レベルでの評価が求められていると推測できる。競技レベルの高さが子どものスポーツ集団における役割形成にも大きな影響をもっているこ

となる。

小学校期、中学校期においてはスポーツ集団内の決定事項は多くの場合、監督やコーチといった大人による決定がなされているという現状が見て取れた。しかし、少数ではあるが、小学校期に自治経験を有するものもあった（度数50）。その9割以上が中学校期においても自治経験を有している。さらに中学校期に自治経験の有るものの8割以上が高校期でも自治経験を有している。子ども期の初期の段階で自治経験を有することが、その後のスポーツ参与時に、自治権のあるスポーツ集団を選択することにつながっているといえることができる。

役職や自治経験というものはスポーツ集団の構造に大きく影響を受けるものであり、スポーツ参加者の外的環境の経験として位置づけることができる。それに対して、スポーツに対する志向をスポーツ参加者の内的経験として位置づける。

スポーツに対する勝利志向か楽しみ志向かという内的経験の違いは小学校期、中学校期、高校期の全てにおいて競技レベルとの関連がみられ、勝利志向において、より競技レベルが高くなっている。さらに、高校期になると人間関係満足度とクラブへの愛着でも勝利志向群で高くなっている。前述したように、「スポーツ場面において合理的・効率的思考を強いられている」スポーツ集団において、さらに勝利志向により合理的・効率的思考が正当化され共有されることにより、同質の人間関係やそこへの愛着が形成されてくるのではないだろうか。

大学期（現在）のスポーツ参加との関わりをみると、小学校期と高校期のスポーツの志向経験と大学でのクラブへの加入状況との関連がみられた。いずれも勝利志向群の体育系クラブ・サークルへの加入の割合が楽しみ志向群のそれより高くなっている。しかし、組織形態別にみると高校の学校運動部に近い体育系クラブより、体育系サークルへの加入が多くなっている。ここでは、高校期までの勝利志向により獲得してきた競技レベルは維持しつつも、正当化された「合理的・効率的思考」よりもサークルという「あいまいさ」が選択されていると指摘できる。

子ども期のスポーツの勝利志向は競技レベルと密接に関わりをもち、人間関係満足度や愛着の度合いを高めることになっている。しかし、同時にその一元的思考に窮屈さを感じているのではないだろうか。

3) 子ども期の経験とスポーツの目的

大学期（現在）のスポーツ活動に対する目的と関連するものとして、まず、中学校期、高校期の組織的スポーツの経験が挙げられた。この組織的スポーツの経験について各学校段階のつながりを組織形態別にみていくと、第一に、小学校期の組織的スポーツの経験は、中学校期と高校期の組織形態と関連がみられる。第二に、中学校期の組織的スポーツ経験と高校

期、大学期の組織形態との関連がみられた。第三に高校期の組織的スポーツ経験は、大学期の組織形態と関連がみられた。組織的スポーツの経験は小学校期から大学でのクラブ・サークルの加入形態まで連続的なつながりを見ることができる。

中学校期の組織的スポーツ経験のない群では「他の目的を達成する」というスポーツ活動以外に集団の目的がおかれている。組織的スポーツ経験の有る群では、「能力の範囲内で活動を楽しむ」「自分自身を鍛え、役に立てる」、「競技成績や評価の向上」の順となっている。

高校期では、経験の有無の双方において「能力の範囲内で活動を楽しむ」ものが最も多くなっている。しかし、経験の無い群では、「他の目的を達成する」ことが次にきている。組織的スポーツ経験の有る群では「自分自身を鍛え、役に立てる」、「競技成績や評価の向上」の順となっている。

青年期に位置づく大学期では、「活動を楽しむ」というスポーツ活動それ自体を目的とすることが、スポーツの中心的意味となっているといえるだろう。しかし、その周辺的意味として、子ども期に組織的スポーツ経験が無ければスポーツ集団を媒介とした「他の目的」の達成という意味が付与されていることがわかる。子ども期にスポーツの経験を有していれば、スポーツ活動それ自体を目的とすることに加え、「スポーツ活動の効果」、「競技成績や評価」といった副次的意味が付与されることになる。

また、このスポーツ活動への意味づけにおいて、関連性がみられたのが小学校期の志向（勝利志向、楽しみ志向）経験であった。小学校期に勝利志向の経験があると、青年期において「活動を楽しむ」という意味づけがなされてくる。小学校期に楽しみ志向の経験があると、「自分自身を鍛え、役に立てる」、「競技成績や評価の向上」といった副次的意味に加え、「他の目的」の達成という意味も付与されることになる。

青年期に確立されるスポーツの意味は、子ども期における組織的スポーツとの関わりにより、「スポーツの効果」や「評価」といった意味が付与され、小学校期の勝利志向との関わりにより「スポーツそれ自体の楽しみ」といった意味に重点がおかれ、それらを実践することの出来るスポーツ集団が選択されている。

5. まとめ

本研究では、子ども期のスポーツ経験と青年期のスポーツ参与との関係について以下の8つの点が明らかになった。

- ① 子ども期のスポーツ経験は上位集団の競技レベルとのつながりを持っている
- ② 青年期におけるスポーツ活動では、子ども期のスポーツ経験が少ないと満足度、人間関係、意欲、集団への愛着が高くなる
- ③ 小学校期に役職経験があるものは、中学校期、高校期の競技レベルが高い

- ④ 下位集団で自治経験があると、その後のスポーツ集団でも自治経験を有する割合が高い
- ⑤ 各学校期において、勝利志向を有すると競技レベルも高くなる
- ⑥ 小学校期、高校期に勝利志向を有すると大学期に体育系クラブ・サークルへ加入し、楽しみ志向を有すると無所属や文化系サークルへの加入が多くなる
- ⑦ 組織的スポーツの経験は小学校期から大学期まで連続的な関連をもっている
- ⑧ 大学期のスポーツ活動の目的に小学校期のスポーツの志向経験（勝利志向、楽しみ志向）が関連している

本論では、子ども期のスポーツ経験と青年期のスポーツ活動を介した自己認識との関連について明らかにすることができた。より主体的なスポーツ活動がなされる青年期において、その目的の形成・選択、参与形態の選択といった自己を認識する過程に子ども期のスポーツ志向の経験が影響していた。さらに、この時点ではすでに競技レベルという選別基準によりスポーツへの価値意識も形成されていたことになる。

つまり、子ども期の勝利志向の経験と競技レベルが密接に結びつくことで、単一的な基準をつくり上げ、青年期のスポーツとの関わりにおける価値基準となっているのである。その為、スポーツ活動の二極的選択として表れているのではないだろうか。この問題点を明らかにする為には、スポーツの環境的側面だけでなく、さらに、スポーツとの関わりを主体的に選択する過程についての分析が必要となる。今回得られた知見をもとに、子ども期のスポーツ経験を構造化し、スポーツ経験の選択過程と自己認識との関わりへの分析へと進めることを今後の課題とする。

本研究は、平成24年度科学研究費補助金若手研究(B)「子どもの自己変容をもたらすスポーツ環境に関する研究」(課題番号22700640 研究代表者 清水一巳)の一部である。

《参考・引用文献》

荒井貞光, 2003, 『クラブ文化が人を育てるー学校・地域を再生するスポーツクラブ論』大修館書店

NHK放送文化研究所, 2006, 『日本人の生活時間・2005』日本放送出版協会

清水一巳, 2011 「「子どもスポーツ」の意味の形成過程に関する研究ースポーツ集団の「秘密」に着目してー」『九州レジャー・レクリエーション研究第1号』九州レジャー・レクリエーション学会

SSF笹川スポーツ財団, 2012, 『青少年のスポーツライフ・データ 10代のスポーツライフ』

菅原禮, 1984, 『スポーツ技術の社会学』不昧堂出版

山本清洋, 2005, 『子どもスポーツの意味解釈』日本評論社